意　見

臨　床　心　理　学　と　獣　医　学

矢野　淳[†]（次郎丸動物病院院長・福岡県獣医師会会員）

私は，福岡大学大学院人文科学科教育・臨床心理専攻博士課程前期（修士課程）を修了し，この春臨床心理士の資格を取得したが，獣医療における臨床心理学の応用について述べさせていただく．

私は福岡市にて小動物病院を開業している．仕事の中で日々割り切れないことに遭遇していた．たとえば，先日，「大変です．うちの子が血便をしたのです．」と飼い主が血相を変えて来院された．犬は粘血便をしているが，若くて比較的元気であり，検査からは命に関わるような大きな異常を認めなかった．よくよく話を聞くと，その犬は，人の食べ物を好きなだけ食べ，ジャーキーも多給されていて，明らかに食餌管理に問題がある事例だった．「うちの子，大丈夫ですか？」と飼い主はひどく心配している様子だから，「あなたが病気の原因です．」とも言えず，状況を説明し治療をしたが，このとき，「動物を何だと思っているのだ」，「私のやっていることは動物にとって本当に助けになっているのか」などの言葉が頭の中をめぐり，治療終了後，自己不全感が残った．このような状況で，診察室では何が起こっているのだろうか，そして獣医師は何ができるのだろうかを明らかにしたい．これが臨床心理学の大学院進学の動機であった．

臨床心理学の大学院は，臨床心理士の養成を目的としている．現在，臨床心理士は国家資格ではないが，1万人を超える資格取得者が存在する．文部科学省が認可している財団法人日本臨床心理士資格認定協会の定める指定大学院の臨床心理学専攻（修士課程）を修了すると，臨床心理士資格試験の受験資格が与えられ，年1回実施される資格試験に合格すると臨床心理士の資格を受けることができる．臨床心理士は，心にストレスや葛藤を抱えている人の悩みを解決し，心に傷を抱えながら生きている人を援助することを臨床心理学的理論や技法を用いて専門的に行うことを業務としている．臨床心理査定（心理テストなど），臨床心理面接（カウンセリングなど），臨床心理的地域援助（コンサルティングやコラボレーションなど）の3領域に対する業務とこれらに対する研究が主な活動業務になっている．現在，臨床心理士は医療をはじめ教育，福祉，司法，労働，産業など様々な分野で活動している．

臨床心理士は，目には見えない心を扱う専門家である．人間の心理メカニズム（知覚，学習，感情，心理的発達など）や心理臨床の研究を基盤とし，そこから導き出されている理論や技法を用いて心を扱ってゆく．心のありようは人それぞれで異なってくるので，心理臨床では個別にその人を深く理解することから援助してゆく特徴がある．そして，その援助自体が被援助者（クライアント）だけでなく，援助者（臨床心理士）のあり方にまで関わってくるため，理論や技法の習得の教育やトレーニングのあり方（スーパービジョンなど），倫理規定にまで，臨床心理学の教育課程では言及する．このような臨床心理学の知恵が，獣医臨床に何か寄与し得ないだろうかということが，大学院での私の研究テーマだった．

獣医療は目覚しく発展し，CTやMRIなど高度医療機器を利用することが可能になり，様々な病気の動物を救うことができるようになった．少子高齢化や核家族化が進むに連れ，動物は家族の一員になり，それ以上の存在になっていることも少なくない．飼い主のニーズの高まりから，獣医療への要望は高度多様化し，高度獣医療やインフォームドコンセント，Evidence Based Medicine（EBM：根拠に基づいた医療）の重要性が叫ばれ一方で，獣医療過誤による訴訟や動物の不法遺棄や虐待などの問題も生じている．獣医学は獣医療技術の発展に多大な貢献をしている．しかしながら，このような獣医療の問題や私が診察室で体験するような獣医師と飼い主のギャップを解きほどく道を充分に示すことができていないように感じていた．

獣医学は，基本的に因果律に基礎をおいた西洋医学を手本とし発展を遂げている．西洋医学は，疾患を臓器別にできる限り分類し，その病態生理を生物科学的方法論によって明らかにし，個々の疾患に応じた診断―治療体系を確立するという方法で発展してきた．このことが，結果として「病気を見て患者を見ず」という傾向を助長してきたのではないかと人の医療では反省されてきている．本来区別することができない「患者そのもの」と

† 連絡責任者：矢野　淳（次郎丸動物病院）
〒814-0165　福岡市早良区次郎丸4-9-42　☎092-866-0010
E-mail : jiroumaru0409@jcom.home.ne.jp

「患者のもつ疾患」を分離する治療者の態度を生み，患者を人間的に疎外することにつながり，そのために患者だけでなく医療従事者の満足度，達成感，充実感を低下させる結果になっている，と指摘されているためだ．

このような反省から，治療者―患者の関係の大切さに目を向け，医療教育に客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：OSCE，オスキーと略称される）と呼ばれる医療面接技能の評価法を導入する大学が増えている．OSCEは，模擬患者とのロールプレイにより医師の臨床能力を評価する実技試験である．このような実技試験を通して，患者との個別の関係性を重視しながら医療情報を充分に聴取するスキルの獲得が医学生に大切だと考えられるようになってきた．そのスキルの習得に臨床心理学の技法である「積極的傾聴」や「共感と受容」などが医療面接の方法論に取り入れられ始めている．

また，心理療法のナラティブ・セラピーを基に提唱されたNarrative Based Medicine（ナラティブ・ベイスド・メディスン；NBM：物語と対話に基づく医療）と呼ばれる医療方法論も注目されている．病気自体をその人の持つ物語（ナラティブ）とし，診療現象を個別的で多義的なものと捉え，治療者と被治療者双方のナラティブを臨床現場に生かそうとする医療方法論である．

たとえば，先の獣医療場面をNBMで説明すると次のようになる．私のナラティブは，「獣医学的診断に基づく病気の評価」，「病因となっている飼い主への否定的な感情」，そして飼い主のナラティブは，（これは対話の中から私に生じた飼い主の文脈理解だが）「動物が心配で可哀そうという動物への感情」，「その原因がわからず対処できないことへの不安」である．NBMでは，主観と客観双方から確認される普遍的真実の存在は仮定できず，究極に全ての人が一致しうる真理と呼べる現実は存在しないとしているので，私と飼い主のナラティブは，私や飼い主の中での真の現実だが，他人の現実にも適応できる真理真実ではないことになる．私のナラティブは飼い主には相容れないかもしれないし，理解できないかもしれない．飼い主のナラティブも同様であり，私には理解が難しいかもしれない．ただ，NBMでは，ナラティブは対話を通じて一つの現実を共同作成した結果生じているもので，対話の中で再構築される可能性があるとしている．そのため，関わりの工夫で飼い主と共有可能なナラティブを獲得できる可能性があるとする．そこでNBMを実践する治療者は，対話の中で飼い主のナラティブを理解し尊重する努力と，お互いのナラティブを織り合わせ両者にとって望ましいナラティブの浮かび上がりを促す工夫を行う．治療者は飼い主のナラティブをその文脈に沿って傾聴し，飼い主のナラティブに沿って，飼い主に受け取りやすい工夫をしながら自身のナラティブを示し，両者にとって受け入れることが可能な新しいナラティブが起こるような努力をすることが診療の目標になる．

今回のケースでは，飼い主の「動物にいろんな食べ物をあげたくなる気持ち」に焦点を当て，その理由を飼い主のナラティブから理解しようとする対話を持った．「家族の中にどうしても食べ物をあげる人がいる」，「いろんなものを与えるのはまずいと思うので，私は気をつけようとしている（しかし与えていることもある）」，「動物が病気になって本当に心配している」ということが飼い主から語られた．私の中で「飼い主は動物のことを愛し，心配している」「動物にいろいろな食べ物を与えてしまう，飼い主にとってどうしようもない理由（これは今回はっきりとわからなかった）があること」が理解できた．飼い主に病因は無いとは言えないまでも，動物が病気になるのはある程度止むを得なかったという飼主の事情に納得でき，飼い主への否定的な感情をやや薄める（私の中での新しいナラティブが生じる）ことができた．しかし，このまま同じことで動物が病気になることを避けるために「獣医学的に今回の病気が食餌に原因があると考えられる」ことを述べ，「家族の皆さんで考える機会を持っていただきたいこと」を獣医師の立場で提案し，「ただし急に現状が改善できないかもしれないので根気強く頑張ってもらう必要があること（家族の中で食べ物を与える人の態度が急に変わり，与えなくなった経験が獣医師である私にはあまり無かったため）」「動物の健康を心配している飼い主の愛情のすばらしさやこれから家族内で行わなければいけない大事業（動物の飼養管理の改善）の苦労へのねぎらい」を語ってその診療は終了した．

このようにNBMは，獣医学において扱いきれなかった治療者―被治療者（飼い主や動物）の関係性や主観（感情や心や身体）などに起因する臨床現場で日常的に生じている問題への解決の道を示す可能性がある．

オスキー，NBMとも医療に事例個別の関係性を取り入れるために臨床心理学の知恵を採用しているといえるだろう．人間性のある医療を提供する工夫とも言えるかもしれない．臨床心理学は，近代科学で扱いきれなかった人間性に焦点をあて，様々な考え方や方法論を導き出す知恵を有するように思う．

臨床獣医療現場では，西洋医学に基づく獣医学の視点だけでは解決できない問題が生じ始めている．獣医師は，獣医学に人間性を取り入れてゆく必要性にせまられていると私は感じている．人間性を有した獣医学の発展は，ヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆）を私達の日々の診療の中から実現することに繋がるのではないかと感じている．

参　考　文　献

［1］ 岡堂哲雄監修：臨床心理学入門事典［現代のエスプリ］別冊，至文堂，東京（2005）

［2］ 斎藤清二，岸本寛史：ナラティブ・ベイスド・メディスンの実践，金剛出版，東京（2003）

［3］ 斎藤清二：はじめての医療面接　コミュニケーション技法とその学び方，医学書院，東京（2000）

［4］ 高橋規子，吉川　悟：ナラティブ・セラピー入門，金剛出版，東京（2001）